

将棋場と文学場の交差

— 木村義雄の人生観を契機として

近藤周吾

木村義雄の人生観を紹介したい。

一九五〇年前後の日本では、ある種の人生観ブームとでも呼ぶべき事態が起きていた。この流行については以前に少し書いたことがある。(拙稿「坂口安吾『わが人生観』を読むために」『富山高専専門学校紀要』第4号、二〇一七・二)

そこで、今回はこの流れの中に木村義雄の人生観を位置づけるとどうなるかというのが、さしあたり関心の的となる。

ひいてはそれが文学社会学、具体的にいえば文学場と将棋場の交差という、より大きな文脈に接続できないかと構想してみたいわけなのだが、しかし、これについては現段階においてはかなり難しく、少なくとも私一人の手には余るので、ここではごく乱暴なラフ・スケッチに止めざるを得ない。

以下、内容の一部においては以前に述べたことと重複すると

ころもあるが、次第的に絞っていくこととする。

一 私の人生観を語ることの流行

一九二九年、ロンドン放送局はアルベルト・アインシュタイン、バートランド・ラッセル、ハーバート・ジョージ・ウェルズら、錚々たる学者や文化人から人生観を聞き出すというラジオ番組を企画した。後に『Living Philosophies』(一九三二、ニューヨーク)として刊行され、続編も『I believe』(一九四七、ロンドン)として刊行された。

これをモデルにした日本版が、一九五〇年九月から五一年九月にかけて雑誌『世界』に連載され、『私の信条』(一九五二・一〇)『續私の信条』(一九五二・一一)として岩波新書から刊行されている。前者は安倍能成、志賀直哉、津田左右吉、和辻哲郎、荒畑寒村、正宗白鳥、中野重治、柳田國男、木村義雄ら二〇名の、後者は恒藤恭、秋田雨雀、三好達治、中野好夫、山川菊栄、川端康成、鈴木大拙、呉清源ら二〇名の信条が語られている。本場ロンドンの続編では「神と宇宙と社会についての信条」を問うたのに対し、日本のものは「仕事と世の中のつながり」を問うていて、スケールにおいてはやや小ぶりの印象も否めないのだが、敗戦から約五年という時期に、いわば大物の文化人たち

を集め、正統二冊を刊行した企画は、日本の新書史上に残るものと評してよいだろう。

ただし、このような〈私の信条〉あるいは〈私の人生観〉を語るといふコンセプト自体は、岩波書店のオリジナルということにはならない。一九五〇年前後の日本において、しばしば見られた型であるからだ。もともと、武者小路実篤『自分の人生観』（『愛と人生』一九五四・六、池田書店）は大正期からのロングセラーなので、例外と見なければならぬだろう。そうであるならば、刊行は戦前でも戦後に爆発的に読まれるようになり、版を重ねた三木清『人生論ノート』（創元社）と、書評などでも話題になった小林秀雄『私の人生観』（一九四九・一〇、創元社）の二冊を、当時影響力の大きかった代表作として挙げるのが順当だろう。

その他にも、正宗白鳥『我が人生観』（『人間』一九五〇・六）、坂口安吾『わが人生観』（『新潮』一九五〇・五、七、五二・一）、河上徹太郎『私の人生観』（『新潮』一九五五・四）といったエッセイが著されている。財界に目を向けてみても、たとえば池田成彬『私の人生観』（文藝春秋新社）が一九五一年三月に刊行されている。

小林秀雄の『私の人生観』は、そもそもは講演であった。冒頭に「この前ここでお話しを依頼された時、「私の人生観」という課題を与えられました。」とあるから、「私の人生観」を語

ることが小林自身の発案でないことは明白だが、坂口安吾や河上徹太郎が似た題名で執筆するときには、小林秀雄という先蹤を意識したであろうことは想像に難くない。

人生観人生観と解り切った様に言っているが、本当はどういう意味合いの言葉なのだろうか。人生という言葉も観という言葉も、非常に古い言葉であるが、両方くっついて人生観というのは、古い事ではありませんまい。少くとも、この言葉が普通に使われ出したのは、ごく近頃の事で、やはり西洋の近代思想が這入って来て、人生に対する新しい見方とか、考え方が起った時から、人生観という言葉も盛んに使われる様になったのだと思う。併しそれかと言って、人生観に相当する言葉は外国にはない様です。或る人の説によると、オイケンの *Lebensanschauungen* が人生観と訳されて以来、人生観という言葉が広く使われる様になったと言うが、*leben* は人生だが *Anschauung* という言葉は観とは余程違う様だ。観という言葉には日本人独特の語感があるからであります。

小林秀雄「私の人生観」

『日本国語大辞典第二版⑦』（二〇〇一・七、小学館）によれば、「人生観」の用例として内村鑑三「月曜講演」（二八九八）、田山花袋「野

の花」(二九〇二)、国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」(二九〇二)、長与善郎「青銅の基督」(一九二三)が挙げられており、補注として「ドイツ語の Anschauung^トの訳として明治二〇年代から「観」が接尾語として成立するにもなつて生じた語。」とある。したがって、引用の前半の「古い事ではありますまい」「近頃の事」という小林の推測は正しいと言える。だが、『大思想家の人生観』で知られるドイツの哲学者ルドルフ・オイケンの「Anschauung」と日本語の「人生観」に語感の違いがあるとするのは、「単純に両者の語義の違いに関してだけ言えば、大きな違いは全くないと言つてよい」とする袴谷憲昭の「小林秀雄『私の人生観』批判」(『駒澤大学仏教学部論集』一九八八・二〇)が的を射ており、確かに肯うことはできない。

それではなぜ、小林秀雄はこのような差異を偽装したのか。それは「見」と「観」の間に重大な差異を見出したいがゆえであるろう。

観というのは見るという意味であるが、そこいらのものが、電車だとか、犬ころだとか、そんなものがやたらと見えたところで仕方がない、極楽浄土が見えて来なければいけない。「観無量寿経」という御経に、十六観というものが説かれております。それによりますと極楽浄土というものは、空想するもので

はない。まさまざと観えて来るものだという。観るという事には順序があり、順序を踏んで観る修練を積めば当然観えて来るものだと言つてあります。先ず日想観とか水想観とかいうものから始める。日輪に想いを凝らせば、太陽が没しても心には太陽の姿が残るであらう。清冽玉の如き水を想えば、やがて極楽の宝の池に清澄な水が心に映じて来るであらう。(下略)

小林秀雄「私の人生観」

武蔵は、見るという事について、観見二つの見様があるという事を言っている。細川忠利の為に書いた覚書のなかに、目付之事というのがあつて、立会いの際、相手方に目を付ける場合、観の目強く、見の目弱く見るべし、と言つております。見の目とは、彼に言わせれば常の目、普通の目の働き方である。敵の動きがあだとかこうだとか分析的に知的に合点する目であるが、もう一つ相手の存在を全体的に直覚する目がある。「目の玉を動かさず、うらやかに見る」目がある、そういう目は、「敵合近づくとも、いか程も遠く見る目」だと言つのです。「意は目に付き、心は付かざるもの也」、常の目は見ようとすると、見ようとしない、心にも目はあるのである。言わば心眼です。見ようとすると意が目を曇らせる。だから見る目を弱く観の目を強くせよと言つ。

同右

旧制高校時代に実際に講演を聴いた後の評論家・磯田光一は、「小林秀雄から一度、幻滅を味わわされた経験を私は持っている」として、「講演中に出てくる「観」とか「見」という語に私は辟易し」、「小林秀雄はダメになった……」と感じた」と当時を回想している。（「小林秀雄という現象——世代的な回想」『群像』一九八三・五。引用は『近代の感情革命——作家論集』一九八七・六、新潮社）

また、前記の袴谷憲昭は、「菩提樹下における釈尊の正しい認識とは、知性によって、インドにおけるヘラクレイトスの基体説である「我」を別決し否定することだったのであり、それは「止」によって準備され、「知性」としての「観」によってのみ果されたと見なければならぬ」と補足・訂正した。つまり、「観」に對置すべきは「止」であり、その「止」に對する「観」とは要するに「知性（知慧）」であるということ、換言すれば、小林秀雄をはじめとする多くの現代人は「仏教は悟りの宗教である」と考えるのに対し、袴谷憲昭は「仏教は知慧 *Prāṇa* の宗教である」と捉え、批判する。

このような小林秀雄を最初に批判したのが坂口安吾である。これについては以前に述べたので繰り返さないが、要するに安吾は「青春論」「教祖の文学」「伝統と反逆」『わが人生観』といっ

た一連のテキストを通じて、小林秀雄を、より具体的にいえば小林秀雄の「見」と「観」の差異化を完膚なきまでに叩こうとしたというふうに見えることができる。

ただし、安吾の批判は主流とはならなかった。なぜなら、小林秀雄の「見」と「観」を受け継ぐ人物が現れたからだ。それが木村義雄である。

二 木村義雄の人生観

将棋の十四世名人・木村義雄の名を、将棋界で知らぬ者はいない。かつては世襲制だった名人が実力制に変わって最初の名人になったのが木村だったからだ。その木村義雄は、棋士である一方で、エッセイストの顔を持つ。今回はそこに注目してみよう。

たとえば、「実力といふもの」（『将棋世界』一九五〇・二）というエッセイがある。そこで木村は「読者が実力を養ひ、自ら充実味を感じるまで」の「五つの段階」は「見・観・察・修・修」なのである。」として、「実力といふものはもつと尊敬を払ふべきではないかと考へる。」と結論した。木村義雄が小林秀雄を読んでいたかどうか、現段階では確証がないものの、ここでいう「見」と「観」は、小林秀雄の人生観と相通するものがある。

木村義雄は、すでに述べたように、『私の信條』にもエッセイを寄せていた。初出は『世界』(一九五二)所収の「私の信條」である。ここでは高木貞治・里見淳・木村義雄・中野重治の連名となっている。高木貞治は一九四〇年に文化勲章を受けた理学博士であり、里見淳と中野重治は作家である。このような文化人と肩を並べていること自体に、木村義雄の果たしたもう一つの功績が窺い知れるだろう。つまり、将棋の実力において第一人者であったのみならず、将棋場、すなわち各界における将棋界の地位を押し上げ、いわゆる有名性を獲得したという意味においても、木村義雄の功績は大きかったということにはほかならない。

さて、木村義雄の「私の信條」であるが、それほど長い文章ではないし、今となつては将棋界においてもほとんど知られていない文章であろうから、資料としてここに再掲しておくことにしたい。

まず、「略歴」をすべて引用しよう。「東京出身、明治三十八年二月生、幼少より将棋に興味を抱き、大正七年慶應普通部中退後外務省に給仕として勤務の傍棋道に志す。同十五年八段となり昭和十三年より十年間名人、同二十四年再び名人位に即き今日に到る。著書「将棋大観」「私の三十五年」「木村将棋」等。」

続いて、本文をすべて引く。

信條などというものは、誰だつて、そう簡単に得られるものではないと思う。文字の上において、一應道徳的なものは首肯されても、そこに體驗の裏付がなければ、ほんとうの信條、不動の信條にはならない。藝道修行の面においても、色色な場合に遭遇して、種種の體驗を経なければ、身につくやうな信條は得られない。

私の場合というなら、三四段時分、棋道に對するこうと思つた信條も、さらに修行の年數を経て、五段、六段と昇る頃には、いつかその信條が動搖し、懷疑的になつて、考へ方も違つてくる。殊に生活的に大きな變化に直面すると、例えば過去十年間のような日本人の誰もが體驗した激動期に採まれると、きびしい生活面からの影響で、藝道修行に對する考え方も變つてくること少なくない。思えばなさないことである。しかし社會的な變化から、現實的な日常生活に影響を蒙ることはどうにもならない。

将棋の戦と同じように、こうした局面の變化に次から次と遭遇し、經驗を重ねることによつて、総合的な判断から、各人各様の信條が得られるのではないかと思う。将棋の戦においても、實戦というものになれば、神のみが知ると思われる種々な場合が生じて、決して定跡通りにはならない。時には定跡にすら懷疑になることが稀れではない。しかしそこに進歩もあれば飛躍も培われるやうな氣がする。結局は、視野が廣くならなければ

ば、批判眼も判断力もつかない。従つて身になる信條は得られないように思う。

棋道における現在の私の信條といへば、修行道を凝視して、ひたすらな精進あるのみである。名人戦とか、名人位とかは、人間の必要に應じて作つた制度であり、名稱である、という考え方も成立はするが、名人戦とか名人位などという大寫しに出會うと、忽ち人間的な弱點が露呈して、これに眩惑され易い。

私は若い人はこの大寫しに眩惑されてもいいと思う。私の過去にもそういう時代があつた。眩惑されることによつて、ひたむきな精進となり、自己の内容を充實出来るなら結構である。が、将棋の如く、藝道修行の面と、技倆を戦わず勝負道との二つの面を思う時、兎角勝利の大寫しに眩惑されて、ほんとうの修行道を見忘れる惧れがある。

勝たんがための研究であり、勝たんがための修行である。といへば、これは人生においても適用されると思うが、このみに熱中すると、修行道という道を見失つて、勝負道の邪道に陥り易い。こうなつては、常時思想が動搖して、到底信條などというものは得られない。

これは私の獨斷である。或は獨善であるかも知れない。が、私は人間に生を享けたからには、人間的な在り方に徹したいと思つている。思つていても到底徹し切れるものではあるまいが、

すくなくとも人生修行にいそしみたいと思つている。

「人生」などといへば、廣大無邊なもので、誰だつて容易に達し得られるものではあるまいと思う。しかし私には人生修行の線と、藝道修行の線とは並行しているかのように考えられる。廣大無邊な人生も、藝道の線によつて、或る高度にすすむことが出来れば、或は人生の線も高度に達し得られるのではないかと考えている。かりにそうだとすれば、藝道修行は修正のものである以上、人生修行にもおそらく極點はあるまい。私の過去に戦わされた千數百局の公開対局を通覧しても、なさないことに満足な将棋が一局もない。甘えれば三、四局はあろうが、それ等は總て負けた将棋である。

勝負に勝つたが故に制度上名人位に就いてはいるが、私は人様から名人などといわれることが恥しい。将棋道を學ぶものとして、修行道からいへば、現在やつと山麓に達した富士登山者に過ぎない。これからが一合目、二合目と峻嶒な道を切り拓いて行く先達の程度と思つている。思えば前途瞭遠である。しかし精進の一步一步をふみしめて行けば、心力のつづく限りは前進することが出来ると思える。盤上における勝敗の、棋士としては重大であるが、将棋道の有難さに、修行道を凝視して行くことがより大切であると信じている。

将棋界では「たどり来て、未だ山麓」は升田幸三の名言として語り継がれている。ところが、升田の好敵手であった木村義雄がすでに「現在やつと山麓に達した富士登山者」の比喩を用いているところが、将棋ファンとしては興味深い。もちろん、将棋を上達する上での教訓として読んで、非常にためになる。

ただし、先に見ておいた小林秀雄と坂口安吾の対立を思うとき、やはり小林秀雄的な「見」と「観」が読み取れてしまう。それはつまり、人生観を語る木村義雄は、かつては実力主義者であったのだとしても、この時点ではすっかり芸道修行の面（修行道）と、技倆を戦わず勝負道（将棋道）の二つの面を器用巧みに使い分ける「教祖」と化しているところがあるということだ。要するに、坂口安吾的な視点から見ると、木村義雄はほとんど小林秀雄なのである。

もちろん、常識的には、木村義雄は何ら間違ったことを言っているわけではない。むしろ将棋の実力と人格を兼ね備えている優れた人物であるからこそ、文字どおりの意味で始祖となり、爾後の棋界の礎を築いたとも言えるわけであるから、そのような意味では全くもって批判される謂われはない。

ところが、それでもこの問題にこだわる所以は、坂口安吾の文学や観戦記を理解する上では、この一点が極めて重要になるからである。つまり、坂口安吾の慧眼は、すでに大成した木村

義雄というよりは、塚田正夫や升田幸三、大山康晴といった次世代の棋士たちの活躍を見越していた。要するに、その世代交替に目を凝らしていたと言ってもいい。そして、その後の将棋の歴史を知る私たちにとって、この慧眼には本当に驚嘆させられる。

それは言い換えると、文学的に見るだけでは了解できない坂口安吾が、将棋を媒介とすることにより、手に取るように理解できるという驚きでもある。将棋の技術的な面からだけ捉えるのではなく、残された棋士の文章や作家の文章と交差させ対話させることによって、新たな相貌が浮かび上がることもあるという例を見る思いがする。どうしてこのようなことが起こるのか。坂口安吾が囲碁好きであったということはもちろん大きな要因だろうが、それだけでは説明がつかないことのように私には思われるのだ。

三 将棋場と文学場の交差

将棋の人氣はいうまでもなく実力第一人者を争う名人戦の人氣である。昨日の名人もひとたび棋力衰えるや平八段となり時にBC級へ落ちることもなきにしもあらずである。実力だけで争う勝負というものは残酷きわまるものである。その激しき、

必死の力闘が人気を生むのである。

坂口安吾「碁にも名人戦つくれ」

坂口安吾は、将棋の実力制になった名人戦をこのように高く評価していた。明らかに実力主義である。

ちなみに、この文章が掲載された大阪版『毎日新聞』（一九四九・五・二九）には、「名人位かくて木村氏へ——第八期将棋名人戦最終局」と、木村義雄・塚田正夫・大山康晴「熱戦を顧みて——木村・塚田・大山会談」という記事も載っていた。

坂口安吾が個人的に囲碁将棋に入れあげているという見方も成立するだろうが、私は少し違う見方をしてみたい。そこで論点を文学社会学の方面へとスライドしてみよう。

ジゼル・サピロ『文学社会学とはなにか』（二〇一七・七、鈴木智之・松下優一訳、世界思想社）の紹介するところによれば、セバスタン・デュボアの一連の研究では、同業者の承認と、有名性の獲得には区別が必要であるとされている。つまり、有名性の獲得は、限定的なサークル内で認められることとは異なり、そこから脱し一般的に認められるには、システムティックなものとしてでなく、有名性を測る諸指標の蓄積過程に注目することが必要であるという見方だ。

もし戦後において将棋場というものがまさに生成しつつあつ

たのだとすれば、将棋が木村義雄とともに有名性を獲得するその過程に目を凝らす必要があるだろう。将棋界という限定的なサークル内で認められるためには、単に将棋が強ければそれだけでよい。ところが、将棋界を離れて、将棋場自体の地位を向上させるためにはメディアに取り上げてもらわなければならない。そのような状況において、木村義雄のエッセイ群を捉えてみる必要がある。

木村義雄・辰野隆・藤澤庫之助「座談会 勝負と人生」（『芸公論』一九四九・二二）、木村義雄「実力といふもの」（『将棋世界』一九五〇・二）、木村義雄「私の信條」（『世界』一九五二・二）、木村義雄・藤澤庫之助・天野大三「将棋と人生——わが修行は芸道の中にある」（『財政』一九五二・二）、加藤信・坂口安吾・木村義雄「呉・藤澤十番碁を語る」（『読売新聞』一九五二・七・四）、木村義雄「恩師」（『誠文堂新光社編「私の人生訓」一九五二・六、誠文堂新光社）等々。

これらのラインナップを見れば、木村義雄が名人に復位したとき、棋士が人生を語るというスタイルを後輩棋士に残し、将棋場の地位向上を図った状況が具体的に了解できる。その後、升田幸三、大山康晴、米長邦雄といった人気棋士たちが、文筆のみならず、講演などで、この木村の遺産を継承していくことになるのは周知のとおりだが、それが今日において当たり前だ

からといって当時から当たり前のことだったと結論するのは拙速に過ぎよう。

その意味では、将棋の名人である木村義雄が岩波新書『私の信条』に多くの作家や研究者とともにエッセイを寄せたことは画期的であった。まさに当時の文壇や財界に自らを組み込み、将棋場の地位向上を図る諸指標の蓄積過程の一階梯であったと捉えることができるからだ。

ちなみに、囲碁では呉清源が「私の信条」(『世界』一九五二・七)を残していることも、最後に一言付け加えておこう。初出では、青野季吉・清水幾太郎・千田是也・呉清源の四名の連名であった。

坂口安吾が碁にも名人戦つくれといったのは、「目下の棋士の力では名人戦を争うと結局名人位が呉八段に行く、つまり中国へ持って行かれてしまう、それを怖れているのだという巷説であるが、こんなバカな話はない。」とあるように、呉清源を実力主義により押し上げたかったからにはかならないが、図らずも文筆の世界では呉清源は木村義雄と肩を並べていたことになる。坂口安吾に限らず、多くの作家たちが当時、囲碁や将棋に関心を持っていたのは、おそらくこのようなジャーナリズムにおけるある種の格付けが進行していたという文脈を推さなければ正しく理解できるものではないだろう。また、木村義雄が将

棋道だけでなく、修行道を持ち出したことの意味も、このコンテキストを押さえないければ理解できない。言い換えると、坂口安吾の見方だけでも、木村義雄の視点だけでも、当時の将棋と文学の状況を十全に語ることはできないということである。

ピエール・ブルデューになぞらえて言うなら、一九五〇年前後という時代は、文学場と将棋場が漸近していた時代だったと総括することができる。つまり、広義の文学者たちと肩を並べることにより、棋界はその社会的な礎を築き上げてきたと、ひとまずは言えそうである。文壇の側もまた、棋界を巻き込むことによって、従来の文壇の在り方を変えていこうとしていたのかもしれない、と。

いづれにせよ、今日の状況とは異なる文脈や差異を多分に含んだ一九五〇年前後の将棋場と文学場の研究については、いまだ研究の端緒にすぎたばかりである。

われわれは、エリアスとともに、科学的諸学問が「あまりに狭隘な事実に基礎に立脚する単一的人間モデルを、検討に付される人間存在の限られた断片をもとにして構築する」のをやめるように願うことができるだろう。それらの学問のそれぞれが「それ固有の説明類型を、網羅的かつ排他的なものとして」提示するからである。ある学問がその「人間モデル」——経済的

人間、精神医学的人間、精神分析的人間、言語的人間、法律的人間、宗教的人間、美学的人間、性愛的人間、社会学的人間など——を唯一可能なものとして擁護するように仕向ける学問的エスノセントリズム (ethnocentrism) は、一部門の実践のなかで、もしくは一分野の非常に特殊な経験をもとに観察され、分析されたものを人間行動全般へと一般化するように導くのである。

ベルナル・ライール『複数的世界 社会諸科学の統一性に関する考察』二〇一六・五、村井重樹訳、青弓社

われわれは今後、将棋と文学という新しい研究の場を構築していく途上で、エッセイストでもある名人や観戦記者でもある作家と向き合っていく必要に迫られるだろう。そのときにはやはり、ライールの、ノルベルト・エリアスやフェルナン・ブローデルを踏まえた右のような言葉にも耳を傾けておく必要がある。

付記

引用には『坂口安吾全集』（一九九八―二〇二二、筑摩書房）、『小林秀雄全作品』17、18（二〇〇四、新潮社）を用いた。